

欧州インフラ事情調査団に参加して



株式会社日本海コンサルタント
社会事業本部/計画研究室/担当グループ長

片岸 将広
KATAGISHI Masahiro

はじめに

平成25年9月9日、東京都内で行われた第13回建設コンサルタント業務・研究発表会において、「金沢市公共レンタサイクル『まちなりの』の特徴と新たなまちづくりの取り組み」と題したプレゼンテーションを行い、全国34件の中から、光栄にも最優秀賞を受賞した。その表彰式の場で、JCCAの方より、「来年、中村先生とヨーロッパに行けるよ。良かったね!」との一言。それまでまったく知らされていなかったため、あまりの驚きと喜びで茫然自失。かくして私は、平成26年6月12日～23日の10泊12日の行程で実施された「平成26年度WAVE・JCCA 欧州インフラ事情調査団」の一員として参加することとなった。

視察行程

視察行程は、トルコ（イスタンブール）、イタリア（ナポリ・ローマ）、スイス（ツェルマット）、ドイツ（フュッセン・ライプツィヒ・ドレスデン・エアフルト）の4カ国8都市を10日間で巡るものであった。都市間の移動は、トルコ～

イタリア間は飛行機であったが、それ以外は鉄道とバスであり、各国の新幹線や氷河特急、登山列車を体験するとともに、車窓から多くの都市や自然を眺めることができた。主に滞在したのは8都市であったが、移動中に立ち寄った小国リヒテンシュタイン、スイスのブリークやクールも素晴らしい都市であった。滞在中、各国の異文化や風土に触れることができ、生涯忘れられない10日間を過ごすことができた。本稿では、上記行程の中で、特に印象に残ったトピックスについて紹介する。

マルマライ計画～日本とトルコの架け橋～

渡欧初日に訪れたトルコの中心都市イスタンブールでは、大成建設株式会社の現地事務所長の案内のもと、「ボスポラス海峡横断鉄道建設工事」（マルマライ計画）の現場を視察した。イスタンブールは、ボスポラス海峡によってアジア大陸側とヨーロッパ大陸側に分断されており、二つの大陸間を地下トンネルでつなぐことは、オスマン帝国時代の1860年に設計図が描かれて以来、“トルコ150年の夢”とされてきた。このような背景の中、日本国際協力機構（JICA）の資金援助のもと、事業費約1,023億円、工期約110カ月をかけて、延長約13.6kmの地下トンネル及び地下鉄が開通した（写真1）。この地下トンネルは、世界最深となる海底60mでの沈埋工法での施工や、世界初となる沈埋工事とトンネルボーリングマシン工法の接続、歴史的市街地の地下におけるナトム工法の採用など、日本が世界に誇るビッグ・プロジェクトであった。このような貴重な現場に触れ、我が国の土木技術力の高さを再認識することができた。

南イタリア海岸沿いの美しい風景

渡欧3日目に訪れたイタリアのナポリでは、専用バス



写真2 アマルフィ海岸



写真3 ライプツィヒの夜の賑わい

で海岸沿いの町を巡り、アマルフィ海岸を視察した（写真2）。「ナポリを見てから死ぬ」と言われるほどの風光明媚な都市であり、その絶景の数々は、言葉に表せない素晴らしいさであった。アマルフィは、海岸沿いの複雑な地形を活かした海洋国家として繁栄した都市であり、その起源は古代ローマ時代に遡る。狭く入り組んだ海岸沿いの道路をナポリから約2時間半をかけて移動し、その間にメータやポジターノといった他の海岸沿いの街も観ることができた。あとで調べると、この海岸沿いの道は、19世紀にナポレオンの命を受けて建設された道路であり、歴史の奥深さを実感した。現在では、国内外から多くの観光客が訪れる世界有数のリゾート地となっており、著名人の別荘も多いとのこと。アクセス性は決して良くないが、ローマ時代からの歴史と文化を守りながら、人々の暮らしがそのまま観光資源となっている好事例として、そのエッセンスをこれからのまちづくりの取組に活かしていきたいと感じた。

人中心の都市空間づくり

今回の欧州視察を通じて最も強く印象に残ったことは、「人中心の都市空間」をうまく街の中に創り出していることである。4カ国8都市を駆け足で巡ったが、どの都市においても街の中心部では自動車をシャットアウトし、昼夜を問わず歩行者が安心して買物や街巡りを楽しんだり、オープンカフェで快適な時間を過ごしたり、広場で友人やカップルが談笑したりする姿が見られた（写真3）。特に、ドイツのフュッセンでは、厳格な都市計画制度のもと、旧市街地が見事に保全・活用されてい



写真4 ツェルマットを走る電気自動車



写真5 エアフルトの美しい風景

るだけでなく、人口1.5万人の小都市とは思えない賑わいがあり、早朝からカフェやパン屋で憩い、語らう多くの人々の姿が見られた。また、スイスのツェルマットでは、マッターホルンふもとの美しい自然や空気、観光客等の歩行者の安全を守るため、ガソリン車の乗入れを規制し、ホテルの送迎バスやタクシー、パトカー、工事現場のトラックに至るすべての自動車が小型電気自動車となっている（写真4）。驚くべきは、これらの取組は最近始まったものではなく、都市政策として長年にわたり継続していることである。我が国でも「人中心」のインフラ整備の重要性が指摘されているが、まだまだ途上であり、その理想形と言える都市空間をたくさん見ることができたのは、自分自身にとって大きな財産である。

おわりに

本稿では、欧州視察の中で印象に残った主なトピックスをご紹介した。これらの内容はごく一部であり、紙面では語り尽くせないほどたくさんの経験と感動を得ることができた。都市計画に携わるプランナーの一人として、今回の経験を活かし、技術研鑽に励みたい。最後に、調査団長として素晴らしい機会を与えてくださった中村英夫先生をはじめ、WAVE及びJCCAの皆様へ厚く御礼を申し上げます。



写真1 ボスポラス海峡をくぐる地下鉄